

琉球大学学術リポジトリ

家畜飼料の常識

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮城, 常夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19569

手取りとし株を傷つけないよう丁寧に、出穂前二〇日頃、おそくても一四、五日頃までに終る様にする。

尚ほ肥として硫酸アンモニヤを施す場合、除草後に撒いて放置する農家もあるが之は前に述べた理由から敢につゝしむべきであり、硫酸アンモニヤを施した直後に中耕除草することが好ましい。

(宮 里 清 松)

家畜飼料の常識

家畜を飼つて健康に育て、その使役能力を高め或は生産力を一層發揮させて農家経済を有利にする為には飼料価値は高くて価格の安くなる様な飼料の配合を考えなければならぬ。

飼料には色々な長所や短所がある。飼料を配合する場合にはよくこれらについて配合しないと飼料費が高くなつたり、家畜の発育が悪かつたり色々な病気に罹り易くなるものである。そこで普通用飼料で用いられている飼料を取りあげて、その特徴と価値について述べて見たいと思ふ。

甘藷は甘藷蔓と葉に沖種に於て最も重要な家畜飼料である。

甘藷は豚の飼料として最も適して居り、これで肥育すると肉質締り極めて純白良い脂肪が得られる。然し甘藷は蛋白質が非常に少なく且鈣物質やビタミンDが少い欠点がある。その為に之等を補給しなければならぬ。甘藷を穀類として換算する場合は甘藷の三―四斤は穀類一斤として計算すればよい。

家畜に与える場合には豚には全飼料の七割以下に制限し、乳牛には最大限二五斤程度までがよい。成鶏には同じく二五斤位にして他の蛋白質飼料や穀類、糖等と配合して与える様にする。甘藷は豚、鶏以外は生のままで結構である。

玉蜀黍は世界各国でも最も広く家畜の飼料として利用されている。之は肥育飼料として非常に濃粉価の高い飼料である。而し欠点として、その濃粉価の高い割に蛋白質の含有量が少く且蛋白質

の質は劣つている。又鈣物質、特にカルシウムが少いことである。ビタミンC・Dも殆ど含んでない。

玉蜀黍は蛋白質及鈣物質とビタミン類を補給すると秀れた飼料になる。家畜に与える場合は挽割にして与える。乳牛には濃厚飼料の二割位までとし、馬、豚、山羊等には濃厚飼料の半量以下にしてよい。

大豆粕は蛋白質飼料として比較的市価も安く最も広く用いられて居る飼料である。市販の豊年バラ粕は蛋白質が四五%含んでいる。

バラ粕は蛋白質の含有量が無く、且その価値も秀れている。而し欠点としては鈣物質とビタミン類特にビタミンAの含有量が少いから、之等を補給する必要がある。蛋白質飼料として乳



鶏の飼料も科学的に配合してやれば産卵率は高くなります

牛には一日四〇―五五〇㍉位与え、成豚には二三〇㍉位、成鶏飼料には五―八㍉位配合するとよい。

魚粉はその蛋白質の成分含量に非常な差異がある。例えば第一物産会社の級品は五二%で、級品が四七%をして三級品が四一%の蛋白質を含んでいる。又中村氏(琉大)の分析結果によれば沖繩で市販されているもので、蛋白質が二%の悪質な魚粉も販売されている。島内産のものでは蛋白質が六、五%のものも魚粉として市販されているが、之は鱈節製造の際の副産物であつて、主として魚の頭と骨を砕いたものである。従つて

之はカルシウムや磷酸の補給にはよいが、蛋白質飼料としては価値のないものである。

単に価格が他の魚粉より安いからというので、安いのを買つと品質の悪い魚粉を買われ損をするのである。

良質の魚粉は蛋白質の量とその質が秀れて居り又カルシウムと磷酸及ビタミンB12が豊富に含まれている。

家畜に給与する量は乳牛には二五〇㍉以内、豚は五〇㍉以内、鶏には混合飼料の二割位まで配合してよい。

牛乳と山羊乳及脱脂乳は蛋白質、鈣物質、及ビタミンの補給として秀れた価値を有する。(脱脂乳にはビタミンAはない)

特に之等の乳製品は離乳期の家畜に給与した場合著しい効果があり、牛乳は内部寄生虫を抑制する力があると云われる。

鈣物質は一般に幼畜、妊畜、搾乳中の牛には多くの量を必要とするが常日頃から之を給与してやるとよい。

鈣物質の飼料の給源としては、石灰石(又は貝殻)と骨粉及食塩であるが、鈣物質の補給として上の三種のものを四〇―四〇―二〇の割合で配合して濃厚飼料(甘藷はまに計算)の一―三%給与するとよい。若し上記のものを別々に家畜に与へる時には、食塩は濃厚飼料の一―一、五%、石灰石粉末及骨粉を夫々濃厚飼料の二%位添加するとよい。

ビタミン類の中、ビタミンAは黄色玉蜀黍や黄色甘藷及青草等の中にカロチンの形で存在している。Aは家畜の発育と繁殖障害等に関係がある。ビタミンDは骨格の生成と幼動物の成長等に関係があるが、之は肝油や青草及青菜等を家畜に与へると共に、家畜を日光浴させるとよい。ビタミンBの缺乏は家畜の成長停止、下痢、脚気、繁殖障害等を起す原因となる。

Bは一般に青草、米糠、酵母等に多く含まれている。

青草は草食獣である牛、馬、山羊には、その基本飼料として絶対に必要であるが、その成分は品種や刈取時期及施肥等により著しく栄養価値に差があるので、その概略を述べよう。

草の種類から見ると蛋白質の含有量はどう料が最も多く、か本科少く、菊科はどう料とか本科の中間になつて居る。

刈取時期によつて草の品質に大きな差異があるが、石塚氏によればスキ生草は五月刈は粗蛋白質三%で六月は二・四%七月が一・六%になり八月には一・三%に減少している。一般に若刈するほど蛋白質の含有量は高い。

又施肥すると蛋白質の含有量は著しく増加するのである。又草の部分は茎に比べて蛋白質やカルシウムに富んでいる。

草は蛋白質の含有量は少ないが、その蛋白質は一般に栄養上優

良な性質を有するものである。又一方、前に述べた様に穀類等に少いカルシウムやビタミンを多く含み、その飼給の上からも特に認識せらるべきで、欧米に於ては豚、鶏まで放牧して青草を充分に与えて家畜を健全に育成すると共に、飼料量を安くしているのである。

豚、鶏にもなるべく柔い青草や青菜を充分に与える様に注意しなければならない。(宮 城 常 夫)

豚コレラを防ぐ方法

或る本の書き出しに「油細は実に豚コレラの本場にして」という一節があり吾々には誠に迷惑な文句であるが申に説明して「吾邦に於ては明治四一年油細に勃発したのを初めとし爾來しばしば大流行があり、或地論の如きは殆んど全滅の惨害を蒙つた事は流行史の語る所である」とある。油細に於ける大流行は大正九年十年で其の当時約二万頭の発生と云われて居るが此等の事実から「豚コレラの本場云々」と云われるようになってしまつたと推察される。

戦前油細が獣疫の巢窟と云われ家畜の伝染病は傳んでもあるという誠に家畜伝染病研究者には都合の良い国とされたが伝染病の危険にいつも曝されている家畜は正に風前の灯のたとえの通り危険であり一度其等の獣疫が流行した場合等は死体の山を築く惨状を呈し後には其の伝染病に耐え得た家畜だけが弱春わづかに子孫を殖やし得るに過ぎないと云われた。勢い其等の病気を耐え得た家畜は多少の免疫性を獲得し得る事になりかゝる事を繰り返す内其地の風土に適した家畜所謂土産畜が造られて来るわけである。然し乍ら其処に優良種畜を導入し改良しようという場合は此等の家畜は直に其等獣疫に直面して犠牲となり改良の実績を擧げ得ない事になる。つまり土産畜が強い家畜

で改良種は弱くて駄目だという事にしてしまふ。此が農民の牢固として抜く事の出来ない信念になつてしまつて農業の發展を阻止してしまう結果となる。実に家畜の改良増殖には先づ防疫が先決問題とされる所以である。そこで今から約二〇年前此等の獣疫を根絶するため日本政府が滿州国と協力して積極的に行出した結果其の業績は終戦直前頃には顕著なものがあつた。特に豚痘(今家畜及び人類を犯す)牛痘(牛痘だけを犯す)に対しては其等の予防注射により其の絶滅は時間の問題とされた。此は全く固の政策と科學陣の勝利であり、やればやれるものだという自信を得たが其の点に立脚して油細の豚コレラを根絶する方法無きやと焦慮するが不幸此は前述の豚痘や牛痘の様なわけにはゆかない複雑な疾病の様である。

凡そ獣疫の発生は後進国に限定されるものと考えて大体間違はないが豚コレラに付いては先進国の合衆国も其の被害は決して少くはないようである。即ち一八三三年オハイオ州で発見されて以来百余年すつと本病の発生があり年間六百万頭といわれるが殊に其の最盛頂は一八八七年一八九七年及び一九一三年一九一四年であり一九二六年には再度大発生を見ている。其の経済的打撃はたつた一力年で六五〇〇万弗に昇り過去一〇力

年の平均は年々二〇〇万弗(二四億円)を下らぬと云われる(米農務省発表)此等は勿論直接の損害であつて間接的なものを計算すると更に莫大な額に増加する。尚、米國に於ては一九一〇年コレラの血清製造が完成し此の三十力年にはコレラ血清及びワクチンの製造は次第に改善され効力は顕著になつて來ているが其の根絶は未だ其の見透しを得ていないようであり、如何にしたら其の発生を最小限度に喰止めるかに腐心している。



豚コレラに罹り次々倒れて行く
豚の悲惨な光景 (米國にて)

又最近の日本食肉加工情報によると日本に於ても昭和三十一年は昨年比し豚コレラが各地に発生し相当蔓延の徴候があると即ち大阪、兵庫、福岡、大分、佐賀に相当数がり思し殊に大分では七十頭位の病豚が肉屋に出されているとの疑いで二斉検査を始めた由である。さて本場の現状はというと四七年二七頭、四八年一八頭、四九年二七三頭、五〇年一四〇頭、五一年八八頭、五年二〇八四頭、五三年四六五頭、五四年二〇六二頭、五五年二六六九頭となつて年々増加の傾向にあるように見受けられる。此は報告されたもののみであらうから實際的